

第54回埼玉文芸賞選評

【小説・戯曲部門】

第54回埼玉文芸賞小説・戯曲部門は星野透氏「冬の夕日」に決した。応募作品は昨年よりやや減って58点、60～70代が約半数と厚かった。80代も7点と健闘、この中に受賞作が出た。選考委員3人のうち2人が強く押し、もう1人も異存なしとした。近年、生病老死がテーマに選ばれることが多いが、本作も同様。鳶職の清吉は現役を引退して1年足らず、妻・滝が病に倒れ、先に逝く。彼も大腿骨を骨折、前立腺肥大を患い手術を受ける。やがて介護施設へ。清吉の病や老いとの闘い、家族との確執、そして孤独などが独特の硬質なタッチで丁寧綴られてゆく。何のために生を享け、八十余年も生きてきたのか、清吉の述懐は切々として、その存在感は並みでない。老いた者の心の痛みや寂しさ、もどかしさが滲み出て、文章は不思議な軋みを見せる。それが作品に味わいを出している。主人公を孤独から救うのは、元ヤンキーかと思われる若い女性介護士の未生。底抜けに明るく、ぶっきら棒。2人の心の交流がこの作品を滋味に富んだ、明るいものにしていく。

あいざわ ともつよ
(相澤 与剛)

【文芸評論・エッセイ・伝記部門】

第54回埼玉文芸賞文芸評論・伝記・エッセイ部門には、10代から80代までの作品56篇が寄せられた。残念ながら本年も埼玉文芸賞を挙げるには至らなかったが、準賞2篇、佳作6篇の珠玉の作が選出された。

準賞の第1席は青島未知氏のエッセイ「ときどき消える」。スポーツクラブで、職場の研修会で、確かに参加しそこにいたはずの自分が「いなかった」と言われ、「不思議なことに急に自信がなくなっていく。出席していた事実やそう断言した私の言葉は、どういうわけか徐々に正体をなくして、確かだったはずの自分が、だんだんぼやけていく」。何気ない日常のちょっとした出来事のなかに実存の危機が覗く瞬間を巧みにとらえている。

第2席となった吉田光氏の「小さい助っ人」は、選者の一人をして「これぞ、随筆」と言わしめた滋味深い作品。現本庄市の「農林業」の大家族のなかで、子ども時代の筆者の眼がみた自給自足の生活の豊かさを確かな筆致で綴っている。

ひらの あきこ
(平野 晶子)

【 児童文学部門 】

応募作品数は37編。埼玉文芸賞は今回も該当作なしだったが、全体のレベルは高く、選考は充実した時間になった。

準賞1席は、福島のりよ「サバンナ、一万三千キロ、ふたり旅」。小学生の男の子ユウが、戦争体験に悔いを残すじいちゃんに誘われ、アフリカのボツワナを目指して旅に出る。異国での出会いを丁寧に書きながら、戦争と平和という大きなテーマに挑んだパワーに拍手を送りたい。作者は前回「レバノンの空の下 難民キャンプに生きる」で準賞を受賞し、今回で3回目となる。

準賞2席は、コキア「マグカップ」。主人公のわたしは小学6年。おばあちゃんちで暮らすおじさんは「こころの病気」で……。 「こころの病気」という題材に挑戦し、思いやる気持ちを温かく描いて印象に残る作品。

奨励賞は白宮響花「僕の隣には」。イケメン・宮本への僕の思いが語られる楽しい短編。

最後に、作品名は省略するが、他にも多くの力作があったことを付け加えたい。

さくらざわ えみこ
(櫻沢 恵美子)

【 詩部門 】

詩部門の応募数は44点であった。そこから、中尾敏康『暗夜巡礼』と前田利夫『生の練習』の単行本詩集2冊が最終的な候補となり、さらに検討が行なわれた。その結果、『暗夜巡礼』が、詩法においてもテーマの掘り下げにおいても一日の長があるとして、全員一致で埼玉文芸賞に決まった。内容的には、生と死、内界と外界のあわいに生じる幻視ないしは幻想が、不思議なリアリティをもって捕捉されている。もとより『生の練習』も魅力あふれる詩集である。

応募作品全体を通して特筆すべきは、原稿の束として寄せられた作品のなかに秀作が多かったこと。佳作とした小川芙由、高島芳幸、104heroの諸作品は、ぜひとも詩集にまとめられるべきであろう。反面、十代のすぐれた作品に与えられる奨励賞には、残念ながら今年は該当するものが見当たらなかった。

のむら きわお
(野村 喜和夫)

【 短歌部門 】

綾部光芳氏は1934年生まれ、受賞作『青^{せいけい}燐』は第九歌集に当たる。1970年から作歌を始め、現在は歌誌「響」を編集発行しているベテラン。

「^{けい}燐」とは^{ともしび}灯、小さいあかり、蛍の意味がある。自身が、かすかな光を放つ存在であるという趣旨からの命名である。

・たにあひをひたすら行き来する夜の青燐のいのちをあはれむべきに
・かすかにもともるひかりを惜しみつつ過ぎゆくときをいとほしみつつ
作風は安定し、静謐な世界を作り出しており、熟成した感じを醸し出している。

人生を感じさせる歌、亡き妻や懐かしい人々を詠った歌、自然詠、津波やコロナにかかわる時代性もあるが、それらは強烈に主張することもなく、たんと詠む。歌の調べの滑らかさは、なめし皮のような風合いを持つ。

奨励賞の小林史弥氏は高校生。切ない恋と四季が調和して抒情を作っていく。若々しいが古風な面も持ち合わせている。

・おめでとう願っていたよ君の恋そしてさよなら僕の初恋

(^{おき}沖 ななも)

【 俳句部門 】

応募作品数は昨年を20編上回る87編であった。10代20代の若手、真ん中世代、ベテランと多彩な構成で、単行本12編、原稿75編の応募作品が集まった。

選考委員の岩淵喜代子、尾堤輝義、田口紅子が全作品に目を通し、1月13日の1回目の選考会議で各自推薦する作品を持ち寄った。評の一致をみた作もあり検討を重ねて、最終候補として埼玉文芸賞3名、佳作10名を選んだ。2月3日に2回目の選考会議を開き、再度協議の上、準賞2名、奨励賞1名を決定した。

準賞は若杉朋哉氏『朋哉句集三』と久下晴美氏『単眼鏡』。佳作1席の山本^{いと}糸人氏「手は話す」は独自の視点で手話の日常を表現しているが、連作のため一句の完成度が弱かった。今回の候補作は拮抗した力量で、埼玉文芸賞を選出できなかった。奨励賞は吉瀬千咲氏「ゴーグルは見た」に決定した。

なお準賞2名、佳作3名が単行本、それ以外の佳作3名、奨励賞1名が原稿での応募であった。

(^{たぐち}田口 ^{べにこ}紅子)

【 川柳部門 】

コロナ以降、生きづらさを感じる人もいれば、そうでない人もいる。

私達はコロナに関係なく生涯をまっとうしなければならない、幸いなことに傍らに川柳がある。

今回は応募数が減少したものの、新しい顔も加わった。埼玉文芸賞に該当する作品は見当たらなかったが準賞2名を推挙し決定した。

準賞1席に中本友持氏の「人生の四季」。自身を投影した作品が目についた。老境を楽しんでいるかのように見える。「出かけます今日の夕食セルフでね」など軽妙な語り口が印象的。準賞2席は村田伊代氏の「花紀行」。望郷を拭いきれない切なさが胸に迫る。「同郷の人の訛りを聞くマスク」。とことん古里と向かい合う作者。奨励賞に佐々木彩乃氏の「はしっこの星」。川柳と俳句の二刀流。「マグカップ人混みをかき分けていけ」など、あどけなさは残るが自由奔放が良い。

さかい せいじ
(酒井 青二)